

手賀沼が海だった頃

NO. 11

地域の歴史や自然を皆で語ろう

2004. 7. 10

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

松ヶ崎城址確認調査の報告会に 参加して 顧問 鈴木英夫

4月11日に柏市教育委員
員会井上文男氏の丁寧な
説明を伺うことができ、2
回に及ぶ確認調査(発掘)
の概要を知ることができ
た。松ヶ崎城に関心を持
った時から、あれこれと埋
藏された遺物・遺跡につ
いて詮索や想像を繰り返
してきたが、実際に地中
や地中から姿を見せた土
器片や埴輪の一部を見るこ
とができただけで、幸せ
である。

想像があたりついていたか
どかにはあまり重要でない。
当日、井上さんの解説を
十分に聞くことはできな
かった。うれしいことに予
想を上回る60人以上の方
が参加してくださったこと
も一因だが、現地では私
が質問されたりして、井
上氏の説明を聞き逃すこ
とがしばしばであっ
た。松ヶ崎集会所で
は司会をおおせつ
かつたためにメモも取
れてはいない。した
がつて、この文は当日
配られた「松ヶ崎城
跡(腰巻遺跡)・腰巻
古墳群トレンチ設定
図」(柏市教育委員
会)をもとに作成し
ているので、事実誤
認があると思うので
その点はお許し願
いたい。



4月11日、参加者に説明する柏
市教委・井上氏(松ヶ崎城址)

まずは、本郭の遺物・埴
輪である。松ヶ崎城の目
的を知るうえでやはり関
心がある。遺物が少ない
のが現時点での印象であ
るが、陶片が小口の近く
から出ている。小口近く
には貯蔵穴らしきものも
出たというので城には
人々の生活の営みがあった
ことが確実にあった。南
側には施設の可能性を持
つ場所もあり、今後に期
待したい。古墳の北側
には土塁に隣接する場所
なんとも奇妙な柱穴では
あるが、城と関係があるの
どうかを含めて興味深い
問題である。

北側の傾斜地では平安
時代の住居跡が確認され
た。本遺跡では平安期の
遺跡は初めての確認であ
る。柏地域では平安時代
の遺跡が少ないだけに、
興味深い。「津」と関連が
あるのかどうか、楽しみ

な遺跡である。
古墳に関連しては埴輪の
破片が郭内から発見され
たので埴輪をもった古墳で
あることが確実にあった。
古墳の調査によってはさら
に埴輪のかつての姿を想像
できるかもしれない。
総じて、今までの調査で
は松ヶ崎城の性格ははつき
りしたとは言えず、さら
に疑問が深まった気がする。
しかし、土塁の規模は従来
想像していたよりもやや大
きいらしいこと、郭の外部
にも遺跡があるらしいこと
など、今後に期待する楽
しみは増えた。ゆっくり
とこの楽しみを味わいつつ
調査を進めればよいと思
う。急ぐ理由は、ない。

「松ヶ崎城と周辺森
林の保存のための署
名に感謝いたしま
す」
会長 川上利男
松ヶ崎城とその周辺の
森を含む台地は、縄文
以前からの歴史を今に伝
えています。貴重な歴史
的遺産と素晴らしい自然
環境を残すために同地区
の保存の署名をお願いし
て参りました。
その結果、柏はもとよ
り、近隣の市町村や県
外からも、また、歴史の
専門家の方々から、市井
の研究者、同好の志、一
般の方々、年齢も高齢
者から、高校生、中学生
までが署名をしてくれま
した。
柏市議会への「保存のた
めの請願」は3月の議会
で採択されました。
私達は多くの方々から
頂いた署名をもって、こ
の請願が実行されるよう
に、更に保存への活動を
進めて参ります。

NEWS!
松ヶ崎城址が柏市
文化財に指定
当会が設立当初から
取り組んできた「松ヶ
崎城址」が、柏市文化
財に7月1日付けで指
定されました。詳細は
次号。
(2004・7・1)

4月11日に柏市教育委員
員会井上文男氏の丁寧な
説明を伺うことができ、2
回に及ぶ確認調査(発掘)
の概要を知ることができ
た。松ヶ崎城に関心を持
った時から、あれこれと埋
藏された遺物・遺跡につ
いて詮索や想像を繰り返
してきたが、実際に地中
や地中から姿を見せた土
器片や埴輪の一部を見るこ
とができただけで、幸せ
である。

バス見学会「東海道を歩く」の宿題2つ・・・予想外の難物(上)

松本 松志

I 二十世紀が丘の古代東海道

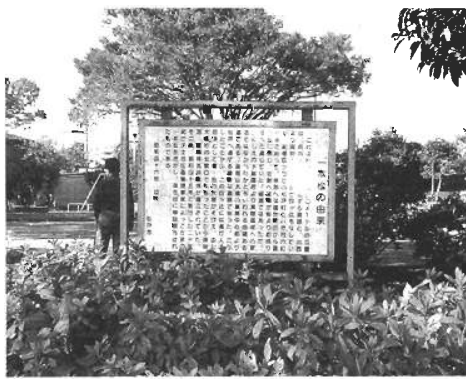
1 はじめに、原稿の遅れた「言い訳」

2003年9月21日に予定されていた見学会が、当日の台風のため、急遽中止になってしまった。仕切り直しの見学会はバスを2台から1台に減らして、11月15日に実施することができた。見学ルートは、「国府台」―「新山遺跡」―「二十世紀が丘」―「常盤平」―「鹿島前遺跡」―「日秀西遺跡」―「竜ヶ崎市半田」であった。時間の都合で、出発前から竜ヶ崎はあきらめムードで出発した。

私は「会」の顧問の鈴木英夫さんのピンチヒッターとして見学場所の3番目、北総線矢切駅裏の「新山遺跡」と「外環工事現場」―「一本松」の説明板(松戸市二十世紀が丘の「いちご公園」設置)までの解説を担当した(午前中の見学の約1時間分)。言うならばメインの講師の高田さんの補助要員のさらに代打といったところである。代打とはいえ見学会の主催者側の一人になりすましていた。ところが何を勘違いされたか、「会」のイベント担当者から見学会の原稿を書けとの指示があった。その時、「日本的曖昧な態度」で「きちん？」とお断りした、はずであった。主催者側の人間が自らが見学会の評価を書くのは、色々大変で、見学会を自画自賛してもどうなることでもなく、上手な見学記の書き様も思い付かず、仕方なく見学会に関連した何か書いてお茶を濁すことにした。

2 2つの宿題

そこで思い付いたのが見学会で出された疑問点(宿題)が2つあったので、それを調べて原稿に仕上げようと考えた。これ



「この看板の中の一文中で古代東海道にハマってしまった・・・」=松戸市二十世紀が丘町のいちご公園

が誤算の始まりであった。

二十世紀が丘の区画整理以前、ここを南東にはぼ一直線に古代東海道が通っており、その路傍に一本の松が立っていた。

宿題は、この「いちご公園」に立つ「一本松」の由来書に関わるもので、下記の2つである。

(1)『「一本松」はどこに立っていたのか。』(区画整理で伐採され、場所がはっきりしない。)

(2) 古代東海道を意味する『いにしえの官道』ということ言葉を、誰が説明板に書き込んだか。(伝承なのか?それとも先行研究なのか?)

3 古代東海道と「二十世紀が丘」区画整理事業・・・2つの由来書

そこで、「一本松」に関する2つの資料を比較したい。第一の資料は、「いちご公園」にある説明板である。第二の資料は松戸市発行の「二十世紀が丘区画整理誌」(注1)のコラム風な「一本松の由来記」である。

(1)『いちご公園』にある「一本松の由来文」(説明板、全文)

一本松の由来

これより北東約500メートルの位置に、南西より北東に通ずる道路と、北西より南東に走る道路が四ツ辻をなしていた。前者はかつての松戸町と八柱村の町村境であつて、東側へは国分新田から国府台に通じ、北側へは陣が前よりお成り道へと通じていた。細道ではあつたが、いにしえの下総国府より常陸国府への官道ではなかつたかともいわれる由緒ある道である。後者は、大橋の集落中心部より松戸へ通ずる重要な道路であつた。こうしたことから、この四ツ辻には通行人の目標として榎・松の大樹がそびえ、また大橋村の玄関口でもあつたことから庚申塔・靈場拝礼供養塔が建立されていた。その後、昭和四十五年に施行していた二十世紀が丘土地区画整理事業により在来の一本松を活かし、現在地に移設復元されたものである。

昭和四十六年 初秋

松戸市

(注、ラインは筆者記入)

なんと、30年も前の看板に「いにしえの下総国府より常陸国府への官道」とはっきり書いてあつた。見学会の下見をしていて気づき、本当にびっくりした。説明板を真面目に読んだのは、20年振り。実はこの公園は自宅から3000m程の距離にある、この辺では一番大きな公園で子供の活動場所でもある。息子達の小さな時は毎日

曜日に掃除に行っていたところで、全然気付かなかったとは恥ずかしい話である。

(2)「二十世紀が丘区画整理誌」の一本松のコラム(全文)

● 一本松

大橋と松戸の堺の畑の真中に、樹齢150年前後の松の大木が一本立っていた。いつ頃かわからないが、この大木は四方から望まれ、「一本松」と呼ばれ、人々に親しまれていた。

すぐそばに庚申塚もあり、また霊場拝礼供養塔もあった。

そこは、陣が前から市川国分境に行く旧道と小山から大橋へ抜ける旧道との交叉点であり、その昔は下総国府へのお成り道に通じる重要な街道であったらしい。

ところが、この地点が、松戸市の計画道路であり、県の有料道路である道にかかるところになった。由緒もあり親しまれている大木である。できるものなら、避けて通るか、せめて移植したかった。しかし、調べてみると、老木の芯は腐っており、樹齢から見ても移植は不可能であった。

結局、「一本松」は伐られたが、市の区画整理で作った「いちご公園」の一隅に樹齢三〇年の松を二代目「一本松」として植え、庚申塚も移し、由来書もそえて人々の記憶に残すことにしたのである。

一本松のあった地点は、現在の「二十世紀が丘萩町10番地」である。

★その件については、第1・第4回の審議会において検討を重ねた。

こちらは、「その昔は下総国府へのお成り道に通じる重要な街道であったらしい」とあって、常識的な表現で江戸幕府に関連させた17〜18世紀以降の伝承に基づく説明と考えられる。

4 「官道」と「古代東海道」

一般的に「古代東海道」の用語は、はっきりした時代確定を経て初めて学問的に使用されるもので、発掘調査が不十分な東葛地域では使い切れないという印象が考古学では強い。そこで、「推定古代東海道」とか、「官道」など、時代の確定を曖昧にしながら発掘報告や研究書が書かれてきた。

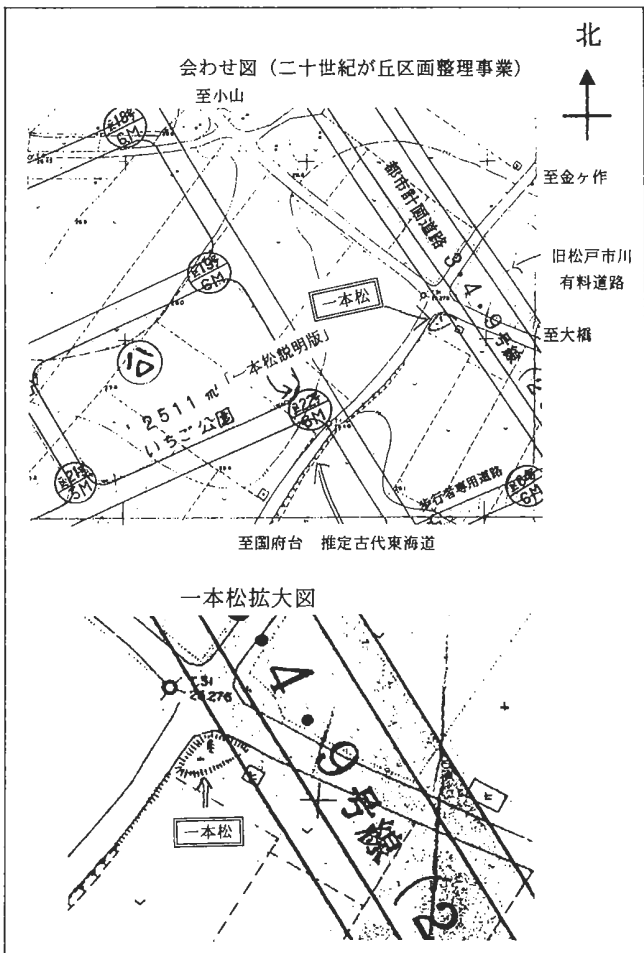
現在では、研究者は「官道」とか「推定古代東海道」と報告書や著書には書くが、口頭で説明する時は、平気で「古代東海道」という用語を使用している。文字通り、「使い分けられている」わけである。言い切るためにはまだ発掘調査が不十分との認識があるためだと思われる。本稿は軽い内容なので、先走って、「古代東海道」と言い切ることにする。

5 宿題その1、「一本松」はどこにあったか？

公園の説明板は、「これより北東約500メートルの位置」にあると書いてある。しかし、「二十世紀が丘区画整理誌」には、「一本松のあった地点は、現在の『二十世紀が丘萩町10番地』である」とあり、大きく食い違っている。『二十世紀が丘萩町10番地』とは説明板の建っている公園のちょうど東側の番地であり、距離は500メートルではなく10メートルにも満たない。500メートルというところ、二十世紀が丘の区画整理地を越えて、その先の「陣方前」の十字路に当たり明確な間違いであった。状況証拠から「二十世紀が丘区画整理誌」に記載された『二十世紀が丘萩町10番地』と想定できるのだが、場所の確定はこれ以外に、いくつか目につく。「一本松」の様子は公園の説明板だと、「この四ツ辻には通行人の目標として榎・松の大樹がそびえ」とあり、「二十世紀が丘区画整理誌」には、「大橋と松戸の堺の畑の真中に、樹齢150年前後の松の大木が一本立っていた」とある。

6 「合わせ図」から「一本松」の所在地は判明

二十世紀が丘区画整理事業は松戸市の直轄事業であった。そのお陰で資料は松戸市



都市整備課に保管されていた(注2)。この資料にたどり着くまで、登記所や市立図書館、行政資料室などいろいろ寄り道があった。

「一本松」の所在地を掲載した地図は、後日倉庫から探し出していただいた区画整理実施準備の為に作成した、区画整理前の土地所有図と区画整理後の土地区画を重ねて表示した『合わせ図』と言われる地図である。そこに、一本松が生えている場所が表示されていた。これで一本松は四つ辻の大橋村寄りの一角に3つの庚申塔や道祖神と一緒にあったことが判明した。ちょうど旧有料道路の歩道部分から、中華料理店の玄関の敷地にかけて生えていた。その番地は確かに『二十世紀が丘荻町10番地』であった。距離は、公園の説明板から20メートルといたところで、説明板にあった500メートルは明らかに間違いである事も確認できた。

正確な位置を記載した「二十世紀が丘区画整理誌」の方も、「大橋と松戸の堺の畑の真中に」と書き過ぎで、松が生えていたのは道路脇であった。

このような事実とずれた表現の原因は、当時一本松周辺には人家が無く、その後の区画整理で、跡形もなく周囲が改変されてしまい、目標物が残っていないため、住民ですら間違いを指摘できなくなっていたと考えられる。それに、説明板を書いた人物の油断もあり、設置後内容を検討することもなく、一度も説明板を見ることがなかったのではないかと思われる(注3)。

「こまでは比較的簡単で、「一本松」の写真が見つからなかったことが心残りな点を除けば、あっさり終了した。しかし、混乱したのは二つ目の宿題である。

注1 松戸市都市部発行「二十世紀が丘区画整理誌」P 38 一九八一年刊

注2 初代の一本松は移植が出来ず伐採され、二代目の一本松は、南東の二十世紀が丘円山町にあった雑木林から移植された(当時の担当者は二人しか市役所に残っていないとのこと。その内の一人、草野さんのお話)。公園の一本松(二代目)はすでに枯れ、自生してきた雑木が太さ30センチを越えて庚申塔を圧迫している。これを一本松の三代目とは呼べない。一本松はきちんとした松の木に戻してもらいたいものである。

注3 実は公園の説明板も二代目と思われる。「二十世紀が丘区画整理誌」(P 38)のコラムの下に写真掲載された案内板が初代らしい。同じ文面で、作り直した説明板が現在のものである。

II 松下説は、辿つたら市史編纂事業が見えてきた

1 説明板の「古代東海道」説は誰の説か。そしてその「伝承」は存在したか

説明板の設置者である松戸市は、当時この種の説明板は専門知識のある教育委員会に依頼して貰いたい。教育委員会社会教育課に聞くと、記録がないが市史編纂室に移った故松下邦夫さんしか、著者は考えられないとの見解であった。

そこで、市史編纂室の資料が現在収蔵されている松戸市立博物館を訪ねて調べたところ、博物館側の見解も、説明板は松下さんが書いたものと考えて間違いはない。しかし、松下さんの資料は寄贈されたままの状態、資料室に保管されているが、裏付けになる資料は知らない。また、仮にあったとしても松下邦夫さんは資料を整理していなかったもので、保管資料から見つけることは出来ないことであった。

そこで、「官道ではなかったかともいわれる」と記載された部分の、古代東海道の伝承があったのかどうか質問したところ、松下さんの性格から考えて新しく見つけた資料や古老の話は、誰から聞いたなど正確な記録を残さない場合でも、必ず何らかの形でどこかで発表(公表)していた。だから、古代東海道の伝承があればどこかで必ず公表してははずで、公表された文章が無ければ伝承はないと言える、とのことであった。松下さんの著述が見つからなければ、松下さんの個人的見解を説明板に書いたと考えて間違いという重要なサゼンションであった。

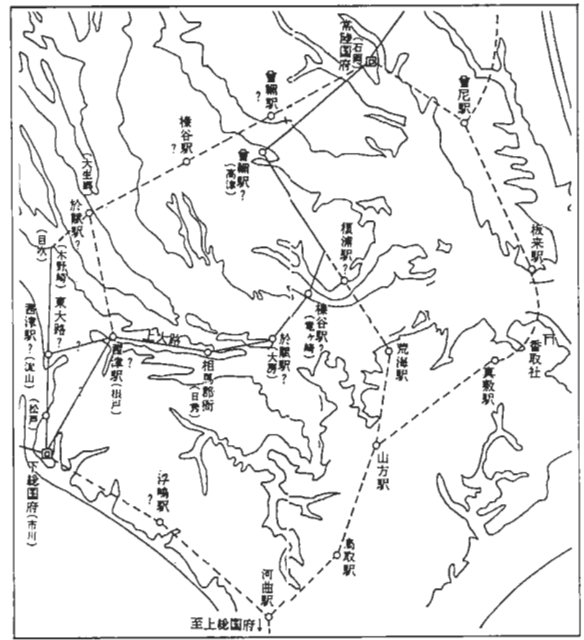
そこで博物館の資料を調べると、松下さん執筆の「古代の道路について」という一文を発見した。「松戸の歴史 小品著作集」(注1)という松下さんが書いた松戸市の広報誌に連載された記事をコピーして一冊にまとめたもので、その一節に「文化財めぐり⑩『古代道路・道しるべ』(昭和44年2月号)」の表題を見つけ、説明板の内容と符合する記述を発見した。しかし、伝承に関連した内容ではなかった。

2 松下さんと古代東海道説

故松下邦夫さんは、市史編纂室の中心職員で、市史編纂室設置以前の昭和21年当時から資料収集・聞き取り調査に直接携わっていた方である。松戸市史(通史は4冊)を執筆(注2)しており、市職員であると同時にいわゆる郷土史家という範疇の方でもある。

彼が書いた「古代の道路について」に、伝承の存在を示唆する記述がない点から判断して、「官道ではなかったかともいわれる」と記載された公園の説明板のいう「官道」とは、松下さんの独自の研究による説と考えて間違いのないと思われる。

松下説は「下総国府である国府台から式場病院前(筆者注：新山遺跡のある化研病院の国府台よりの隣の病院)―夏刈(筆者注：大橋村の字名、北国分と接している)―陣ヶ前(筆者注：二十世紀が丘の隣の地籍一本松からほぼ500メートル)―松戸新田―総台―日暮―京葉ガスタンク前(筆者注：常盤平駅の手前)―栗ヶ沢―酒井根(柏市)―を経て我孫子町鎌倉街道(根戸)」と、今回の講師の高田さんが柏市史に書い



「下総・常陸間交通変遷図」(西島定生作図)。市川から根戸に茜津駅を置く実線が松下説



「平安時代前期の下総国一常陸国間の古代東海道」(柏市史)。藤心に茜津駅を置く実線が高田説

た古代東海道ルートとかなりの部分で重複する。そして、松戸市史に記載された古代東海道観からかなり逸脱しているように見える(注3)。

ここで、松戸市史編纂の中心スタッフでありながら、市史とは異なる自説を発表している独自性を高く評価したくなり、結果的に藪を突くことになってしまった。

そこまで頑張ったはずの松下説を昭和50年以後、松下さんは公表しなくなった。なぜ公表しなくなったか、この説明が逆にむずかしくなり、だんだん松下説の評価に立ち入った為、色々難問を抱え込むことになった。

3 周辺の市史編纂と松下説

松下説を独自性を持った学説と仮定して周辺の市史と比較すると、当然高田説の掲載されている柏市史だけはルートが重複するが、他の市史とは共通点が少ない。そこで、どこでもある市史編纂のどろどろした問題(地元勢力による編纂か、中央

の学者による外人部隊による編纂か、その折衷案か)を使って説明したくなる。

周辺市町村では最も早く、市職員である松下さんなどが中心になって刊行された松戸市史に対し、最強の外人部隊による市史編纂として有名な市川市史(注4)が昭和49年に発行され、そこに諸説ある中で、古代東海道を771年以降、「豊島一井上駅(墨田区寺島)ー下総国府ー茜津(松戸市松戸)ー於武(我孫子市布施)を経て毛野川を渡って常陸に入る道」と記載されていた。

市川市史の執筆者が井上光貞、岡田隆夫と著名な歴史学者の権威の前に、松下さんは自説の主張を控えてしまったのか、不思議なことに、地元ではその後は松下ルートの研究者は出て来なかった。

他の松戸の歴史関係者の多くも(鈴木風南子氏を除く)も、松戸市松戸を通り流山に向かう北よりのルートに流れていたようである。

筆者の個人的見解を勝手に整理させていただくとすると、松戸市の歴史関係者は、古代東海道の駅路論争より更級日記の「まつさと」論に興味に移り、「古代東海道の大橋ー常盤平通過説(松下ルート)」はほとんど忘れられてしまったと言いうことになる。

出版されたものを見る限り、古代道路に関する記述自体が段々減ってきており、1990年頃が最後(注5)で、最近の松戸の歴史関係の案内書には、古代道路の記述は全くなくなってしまった。市川市史を筆頭に、中央での出版はほとんど「茜津」が松戸市松戸と推定したことは、どっちに転んでも「茜津は松戸市内のどこか」と安心していたのが、その後、状況が逆転し、立ち遅れている印象を受ける。

4 3つ目の資料、松下氏が著述した「京葉散歩(2)松戸市」

今回の見学会の講師の高田さんが提唱する以前に「国府台く新山遺跡く常磐平」ルートを活字にしたものはもう1つあり、それを紹介したい。

「京葉散歩(2)松戸市」(昭和48年8月発行)(注6)である。サンケイ新聞の地域版週刊誌を単行本に仕立てたものである。内容は、「交差点をお成り道から直進すると、最近の【二十世紀が丘区画整理】事業と、有料道路の開通で道路は大きく変えられてしまったが、昔は式場病院前を通って国分寺と通じていた。その道は、たぶん下総国府と常陸国府(茨城県石岡市)とを結ぶ古代官道ではなかったかと思われる。」(全文)とあり、相変わらず、証拠や論拠を示さず、あたかも「伝聞」があるように装う松下説の特徴を示している。

5 言い訳その2・・・「京葉散歩(2)松戸市」は本当は誰が書いたか?

最初の予定では「京葉散歩(2)松戸市」を論拠に、「松下説は、地元では一

定の評価を受けて支持された時期があったが、結局、大きな支持を受けることなく消えていった」という最終章を書いて終わるはずであった。

しかし、松下説の基本的な枠組みも分からず、松下氏自身のデータがほとんどないので、もう少し調査しようとする、すでに「会の編集者」から申し渡されていた締め切り日時をかなりオーバーしているが、冬休み前には十分間に合うという算段を立て最後の追加調査を始めた。「松戸史談」（注7）に故松下さんの追悼文があるので、それを使って原稿を完成させようとの下心で、県立西部図書館に出かけた。

「松戸史談42号」を書庫から出してもらう間に、暇つぶしに郷土史のコーナーを見回すと、以前には気づかなかったが、松下邦夫関係の資料が意外に揃っていた。その中に、見たことがない資料（松下邦夫先生 著作一覽）（注8）が目に入った。そこには、「NO27、『京葉散歩』本文34 編の執筆」と書かれていた。

いろいろ驚くことの多い古代東海道だが、京葉散歩を松下さん自ら執筆したとなると、松下説の支持者は本人だけという困ったことになり、これでは「外人部隊にやられた地元勢力」（市川市対松戸市）という単純明快な勧善懲悪調のシナリオが崩れてしまう。松下説が流布しているようなウソを公表しかねなかった訳で、これで原稿締め切りどころではなくなった。

6 「京葉散歩（2）松戸市」の本当の著者は誰か？

「京葉散歩（2）松戸市」は確実に松下説に基づく記述である。改めて注意して読み直すと、いろいろ気になる。問題になるのは「京葉散歩（2）松戸市」の奥付で、編者略歴と銘打って横塚和男氏の生年月日、学歴、産経新聞の経歴を詳しく記載して、最後にサンケイ・リビング編集長と明記してある。さらに「丁寧におもな編著書」として、「都会病」、「関東周辺一泊旅行」、「東京風土図」Ⅰ～Ⅳ、「改訂東京風土図」とある。編者欄には「フジサンケイリビング総武・常磐編集部」とあり奇妙なずれがある。編者と言うより著者のような端書きは、本を書いたのは横塚氏と、ごく自然に読んでしまう。

はしがきには、「これまでの郷土紹介や地誌のような単なる考古学的なものではなく、現在が起点となった、いわば『考現学』であり、文字通り、足で書いた記事とマンガ地図なのです。」と謳ってあるように、松下さんの名前を隠す営業上の必要性は十分にあった。横塚和男氏の編者略歴まで書くのはいかがと思うが、松下さんの名前を隠すことには悪意は感じられない。よく読めば分かるはずとは言え、手の込んだイタズラに引っかけたといった心境である。

7 書いた本人からも忘れられた公園の説明板

松下氏死後、追悼のために作成された「松下邦夫先生 著作一覽」からはつきりしたことは、「公園の説明板」、松戸市の広報紙に掲載された「古代の道路について」、「京葉散歩」の3つは、同一人物の執筆と考えられる。

ただし、「松下邦夫先生 著作一覽」に、公園の説明板の執筆記録はない。一覽には碑文が8件掲載されているが、近くの「二十世紀梨記念碑」の執筆記録はきちんと記載されている。「いちご公園の説明板」の位置付けは、松下さん自身も、「著作一覽」の執筆者も、ごく軽い評価であることも垣間見える。少なくとも主観的な認識として「松下説」は、松下邦夫さん自身にとっては「学説」としての認識があったかどうか疑わしい。

注1 「松戸の歴史 小品著作集」。製本ではなくコピーをまとめたもの。松戸博物館、千葉県立西部図書館所蔵。社会教育課にも同種のものがあった。

該当資料「文化財めぐり⑩『古代道路・道しるべ』（昭和44年2月号）」

注2 松下邦夫執筆は松戸市史（通史は4冊）において、上巻第1章「松戸の現勢」（約258ページ）及び下巻その1（明治編に当たるもの、1冊）。

注3 松戸市史ははつきり書いていないので、推測するところ吉田東伍説に立っているようである。吉田説は、【井上（墨田）—茜津（松戸）—於武（我孫子）—榛谷（若柴・佐貫）—常陸国】。なお、市史には「茜津」は「馬津」の誤という吉田説をわざわざ紹介している。

注4 「市川市史の第2巻（古代編）（昭和49年3月30日刊）」P45

「武蔵の国豊島駅（千代田区麹町）【筆者注：現在では北区西ヶ原（王寺駅の近くの台地と推定）から住田川を渡り、下総国には入り、井上駅（墨田区寺島）を経て、太日川を渡り、下総国府に至り、さらには茜津（松戸市松戸）・於武（我孫子市布施）を経て毛野川を渡って常陸に入る道」と記載。

注5 例外は90年から始まった松戸史談29～32号の4年間、連続掲載された鈴木風南子「北総古道考」など。1991年以降、井上の国府付属駅確定から、松戸市中心部を東海道が通る可能性が無くなったことと連動しているようだ。

注6 フジサンケイリビング編「京葉散歩（2）松戸市」（昭和48年8月刊）

サンケイ新聞の折り込みの地域版週刊誌を単行本に仕立てたものである。

注7 松戸史談会「松戸史談」42号、2002年刊

注8 松戸史談会作成「松下邦夫先生 著作一覽」、ワープロ打ちの資料、全14ページ、掲載著述数合計222点にのぼる目録点数

* 「パス見学会『東海道を歩く』の宿題2つ（下）」は次号に掲載します。

当会会員の皆様へ

事務局長 槇 慎吾

1. 当会は設立5周年を機に第2段階を迎えます。

日頃は当会へのご理解とご支援をいただき、まことに有り難うございます。松ヶ崎城址をはじめ、地域歴史の勉強を希望され入会された会員の皆様方には、これまで十分な対応が出来得なかつた部分がありましたことをお詫び申し上げます。

今年には当会設立後5周年、会員と関係各位のご協力により「松ヶ崎城址の保存と周辺環境の保全」の請願が柏市議会で採択され、7月1日付けで松ヶ崎城址が柏市文化財に指定されました。これまで開催してまいりました松ヶ崎城址の見学会、古代東海道を歩く会、歴史講演・展示会その他に今年から城址保存と周辺環境保全活動が加わります。

それには会員各位の一層のお力添えが必要となります。

ります。これまで当会に関する情報提供不足を反省し、できるだけタイムリーな情報をお届けできる様努力してまいりますので今後ともご協力を賜ります様、宜しくお願い申し上げます。

2. 会員との情報受信についてご協力をお願いいたします。

現在、年3回の会報をお届けしてはいますが、その他の情報送達には郵送代等の費用がかかります。先にお届けした往復葉書の返信用に連絡先情報(FAX番号/Eメールアドレス)のご回答をお願いいたします。当会の情報提供のみに使用いたします。

会員の皆様で日頃、ホームページとメールをお使いの方は是非、当会のホームページをご覧いただき、当会の活性化についてご意見をメールでお寄せいただきたいと思います。

ご承知のとおり、当会は会員善意のボランティアで成り立っています。限られた会費の中で少しでも会員各位のご満足に應えるには会員各位のご協力が必要となります。

3. 事務局体制を充実します。

本年度より事務局を充実し、よりきめ細かな会員へのサービス提供に努めます。

コラム

郷土史素人目

(1)

中津川督章

この地域の特色を作っている中心的存在、手賀沼からこのコラムを始める。

この沼、何故「手賀沼」と呼ばれているのか。隣にある印旛沼は、印旛郡の中にあるから「印旛沼」と呼んでいるのである。同じように、手賀沼を「相馬沼」と名付けてよかつた筈である。ところが、「手賀」という一地域の地名を使っ

ることとなりました。先にも触れましたように従来の活動に加え、「城址保存周辺環境の保全」という大変重要な課題に積極的に取り組むことにもなりました。

これまでの事務局は全員が日常お仕事を持つ女性が担当、ご苦勞をかけたまいりました。このたび、当会の縁の下役を担当してまいりました槇と

いる。何故なのか。

東京湾(江戸湾)は首都の名をとっている。江戸時代から日本を代表する都市だから、当然過ぎるほどである。

ところで伊勢湾は「名古屋湾」とか「尾張湾」とは言わない。この湾内では「伊勢」が全国的に最も知られた土地であった。

伊勢神宮があるからで、江戸時代から伊勢参りは全国的であった。右の例から、かつての「手賀」という一地域は

かなり広範囲に知られ注目された有名な場所だった、と想像することができ

小池が事務局に加わり、会のため地域のため微力ながらお手伝いをさせていただくことになりました。どうぞ宜しくお願いいたします。

以上

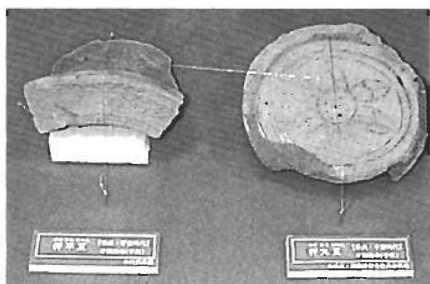
「手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会」事務局一同
槇 慎吾(事務局長)
小池芳規(副事務局長)
浦久淳子・北 絃子

新名克子
松平信子
増田泰子
武藤 光
渡邊成子



会 ホームページ
<http://www.matsugasakijo.org/>
事務局Eメールアドレス
macmaki@tohkats.co.jp

える。手賀には、沼周辺で唯一古代瓦の出る廃寺があった。かつて有名な土地だったのなら、他に何かあるのではないかと、期待も抱かせる。



手賀廃寺古代瓦(第3回「沼南のあゆみ」展から)

柏市文化財指定、当会5周年記念

「松ヶ崎城と街道（みち）」

「中世柏地域の陸上交通」（仮題）」

11月28日にシンポジウム&展示会

松ヶ崎城址の柏市文化財指定、会の設立5周年を記念して11月28日（日）、柏中央公民館でシンポジウムと展示会を開催します。会の5年間の活動と、柏市の確認調査で明らかになった松ヶ崎城と周辺の歴史がテーマ。特に今回は陸上交通にスポットをあて、近隣遺跡も取り上げます。シン

定）*イベントのお手伝い募集。問合せは事務局まで。

地域史を話す会

地域の歴史について、有志が集まって話しています。毎月第1日曜日に柏駅東口で開催。▽8月は休会、9月は5日（日）午後1〜3時▽柏駅前通り商店街会議室（イトーヨーカ堂のある通り、レストラン伍平の3階。旧水戸街道近く）▽参加無料▽問い合わせ会ホームページ、または04-71931-3610（平日日中のみ）中津川さん

おいしい料理を

食べ歩きましょ♪

会員有志で柏近辺のおいしいお店をまわっています。イタリアン、そば会席、フレンチと味わい4回目の今回は吉川のみならず！7月21日夜に行きます。詳細はお問い合わせを。▽04-7133-6438松平さん

活動記録

平成16年
3月～6月

・「松ヶ崎城址と周辺森林の保存」に関する請願書を柏市議会に提出

事務局

慎 慎吾 〒277-0826
柏市宿連寺232-14

- 2月27日 請願の趣旨2が建設委員会採択
- 3月16日 請願の趣旨1が教育経済委員会採択
- 3月17日 請願が柏市議会本会議で採択
- 3月19日 「地域史を話す会」3回
- 4月4日 「柏駅前商店街会議室」第5回総会
- 4月11日 参加24人（松ヶ崎集会所）
- 4月11日 松ヶ崎城址の現地案内・調査の結果説明会
- 4月11日 説明は柏市教育委員会文化財担当者。参加者は現地案内会に60人、説明会に52人。（案内会は城址、説明会は松ヶ崎集会所）
- 4月6日 「地域史を話す会」4回

会ホームページができました

http://www.matsugasakijo.org/
投稿寄稿、お待ちします。松ヶ崎近辺の風景、植物の写真等、HP上のお問い合わせアドレスへ。「〇月〇日、〇〇見つけました」など、「ちょっと一言」も一緒に。

TEL・fax 04-7134-3322
北 絃子 〒277-0835 柏市松ヶ崎415-5、1-206
TEL・fax 04-7131-8879
会報作成 浦久淳子
TEL・fax 04-7155-2351

hedoro

(3)

青山 和平

こんぶくろ池は、手賀沼の最後の源流である。しかし、このこんぶくろ池の流れも僅かになり、寄り添っている弁天池も微かに動く水にその流れを感じてに過ぎないし、大津川にあった2つの源流はすで

に無い。けれど、源流というものの意味をしっかりと表現している点では、源流の名に落ちない。それはこんぶくろ池が野馬土手という歴史を抱え込み、自然の豊かさを着込んでいるからではない。大地のエネルギーのポテンシャルの高さにある。人は経絡という気の流れを24本持っている。経絡の要所要所がツボと呼ばれているものである。この人の経絡と同じものを大

地は持っている。このエネルギーの流れをこんぶくろ池に於いて感じる。弁天池とそのせせらぎにはより多く感じて、思わずそこにたたずんでしまう。江戸城を始め、歴史を画するものは、そのような土地に建てられるし、そのような配置をされていく。残っていくことの意味を考えると、その土地のエネルギーの高さがそうさせるのかもしれない。松ヶ崎城跡にもその流れ

を感じる。約1万年の歴史を手付かず持っている所だし、この考える会にもあまたの人材が集まってきた。そして、競売物件という悪条件をこえて地主の方々や行政の話し合いも始まった。常磐新線の柏キャンパス駅のそばに、18・5畝の森林に囲まれたこんぶくろ池が残る。手賀沼の要所である松ヶ崎城跡、偶然を超えた何かを感じる。（*今回から改題）

一緒に活動しませんか♪

地域の歴史や自然に興味のある方、一緒に活動しませんか。年会費は2000円、申し込みは事務局まで。「お名前、郵便番号、住所、電話、ファックス、メールアドレス」をハガキ・ファックス・お電話・Eメール（アドレスは7面）のいずれかでお知らせください。会費は下記銀行振込み先、会員の皆様の納入につきましては、同じく下記、会費問い合わせ先まで。▽会費振込み先 千葉銀行柏支店（店NO-008）普通預金3461475（手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 伊江有可里）▽会費問い合わせ 会計 松平信子 TEL・fax 04-7133-6438